

窓辺

富士山

宮地 良樹

静岡県人にとって富士山は靈峰といえ、そこにあるのが当たり前で、ほぼ日常に埋没した存在でしょ。高校生まで日々、富士山が視野の一角を占めていた私にとっても同様で、「仰美蓉の嶺高し」(中学校の徒会の歌)、「芙蓉のかげを水にくむ」(高校の道遥歌)などと口ずさんではいたものの、ことさら富士山を仰ぎ見ようという動機には乏しいものがありました。

しかし、静岡を離れて「身

近に富士山がない」生活になつてみると、なぜか心にぽつかり空洞ができたような虚無感にさいなまれました。京都から上京のたびに新幹線で富士川鉄橋を渡るころ、なぜか富士山を見よう目が覚めることが日常化しました。

私のとつておきのもう一つの富士山ビューポイントは、新幹線で用宗を過ぎたあたりから安倍川を渡るまでの間に、新幹線の右側にターホールから「今日は見えるかな」と富士山の姿を探すのが日課となりました。

50年ぶりに静岡に舞い戻り、毎朝ホテルのエレベーターホールから「今日は見えるかな」と富士山の姿を探すのが日課となりました。

土山を拌める口がないことでした。朝一番で富士山がくつきり見えると心が洗われ、すがすがしい気分になります。加齢とともに静岡県人の血が騒ぐのか、ますます富士山に耽溺し、富士山世界遺産センター、栗ケ岳山頂、ふじのくに茶の都ミュージアム、日本平夢テラスなどにも足を運んだほどです。

(静岡社会健康医学
大学院大学長)